

林 桂

奨学生に応募の10作品を1組とする名前を伏せられた31編（高校生2編を含む）の応募作を対象に、選考を行つた。推薦順位及び推薦編数の指定はない条件での選考である。

まず、10作品のうち佳作として推せる作品が5作品以上あるものを推薦の目途として選考を行つた。結果、8編が該当した。編数が10編に満たなかつたので、4作品までに推薦基準を下げて、4編を追加し12編を得た。順位等の選考は必要なく、編数も10編を越えて適切と思われたので、このまま12編を推薦作とすることとした。

以下、林が推薦した12編の佳作を1編ずつ引用して紹介に代えたい。なお、作者名は選後に知つたものである。記憶に残る作品も多いが、ここでは敢えて作者の詮索を行わずに選考した。

奨学生となつたのは、選考委員の4名以上が推した作者（高校生3名以上）である。

推薦（順不同）

奥村俊哉（長谷川柊香）

酔つた父は月まで水を買いに行く

小笠原風花（あお）

雲は水蒸気だから寝転べないよ／と言うだけの簡単なお

仕事です

吉沢美香（吉沢美香）

梅雨冷の／ずずずずずとクレラツプ

大橋弘典（大橋弘典）

月彦全句集を抱き汗の腋

桙伸太郎（立花ばとん）

椿　落ちる／椿があつたところ／　の／空氣

小林奔

映写機の前に立つてる先生の／ひろい背中にラテンアメ

リカ

森山ひかる（桜咲）

急降下の夢を見て／口から出た心臓を／戻すのに／手間取り／遅刻しました

松下誠一（松下誠一）

ファスナーを最大限に引きあげて／なにもできないんだ
ぼくたちは

白野実悠（白野）

肺呼吸だからいけないのか／きみは水族館でわたしを見
ない

伊藤万由子（浅葱）

抹茶の甘さを知った日に／すとんと理解した／母もいつ
か居なくなること

関朱夏（藤ほたる）

こもれびの影が／ゆらめくこの部屋に／ずうつと海が
あつたんだよね

折田日々希（折田日々希）

コーヒーの／ぬるさ感じるてのひらに／思い出す昼の／
深海のねむさ